

經濟論叢

第七十八卷 第三號

地方自治擁護の論理……………島 恭 彦 (1)

線型計画論と技術的補完……………今 川 正 (23)

第一次大戦前におけるアメリカの海外投資……岡 田 賢 一 (49)

林業專業地帯の実態とその性格……………山 岡 亮 一 (70)

〔昭和三十一年九月〕

京 都 大 學 經 濟 學 會

林業專業地帯の実態とその性格

——京都大学林業問題研究会「林業地帯」を読む人々のために——

山 岡 亮 一

一

わが国の山村とよばれるところにおよそ二つの型が見られる。一つの型はいわば農業と林業が未分化の状態にある「山村」がそれであつて、古島徹雄氏の「山村の構造」において対象とされた採草地、燃料林が主として問題となるような地帯であり、今一つの型は、農業はほとんど言うに足らず、林業を專業として、生計の基礎をもっぱら林業に依存せざるを得ぬような地帯である。前者においてはいわゆる「封建性」が根強く残存するものと見られて来たのであるが、後者においては、從來その社会経済構造が社会科学の対象とならず、社会科学のいわば「空白地帯」のまま置忘れられた形をとつて来た。この点に着目して、京都大学人文科学研究所のメンバーを中心とする京

大林業問題研究会は昭和二八年以降夏の休みが来る毎に山深き村々を訪ね、一年に一ヶ村又は二ヶ村の実態調査を重ねて来た。そしてその成果が人文科学研究所の河野、渡部、吉田の各所員の編集によつて一冊の書物としてまとめられ、高陽書院の好意によつて刊行された。

出来上つたものは、近畿（広義の）民有林地帯の実態調査報告という形をとっている。奈良県吉野郡の川上村、上北山村、十津川村、徳島県賀賀郡の木頭村の実態が、ただ併列的にならべられているように見える。だがこの調査研究の成果はその背後に多くの調査研究の積みかさなりがかくれていることを指摘しておかねばならない。この調査がはじめられる前段階において既に研究会内の各グループは各々単独に或は共同して、林業問題を手がけて来た。たとえば人文科学研究所の今西所員を中心

とする人類学専攻者たちと経済学部農林経済学研究室並に医学部の公衆衛生学教室では一の調査グループとして吉野郡野迫川村の調査を実施し、又医学部の公衆衛生学教室と経済学部農業経済学研究室とは一グループとして京都府与謝郡簡川村（現在伊根町に合併）と南桑田郡宮前村（現在亀岡市に合併）とを調査し、更に教養部社会学教室と経済学部農業経済学研究室とは一グループとして宇治市笠取地区の調査を共にしている。なお各研究グループは各々単独に山村の調査を実施している。たとえば社会学教室は滋賀県東浅井郡東草野村を、農学部農林経済学教室は広島県双三郡布野町その他を、経済学部農業経済学研究室は京都府船井郡瑞穂町（旧檜山地区）をというように。

従つてこの書物で取りあげられた調査が實施される前段階において、既に林業或は山村に関する豫備的知識は一応つくり上げられていたことは重要である。調査に入るに先立ち林業問題研究の態勢は整備されていたものと見るべきであらう。いわばこのような調査についての熟練者達によつて構成され、しかも各々に共通の問題意識をもつて一村一村と調査を仕上げていったというのが、この調査の生れて来た環境といえよう。

このように調査はめぐまれた主體的条件下に實施されたものではあるが、最初に取り上げられた木頭村の調査と最後の十津川村の調査との間に二八年と三〇年という三年の開きがあり、

同じく林業地帯といつても後れた村と進んだ村との相違が明瞭に見とられる場合、年一年と変貌しつつある村の表情は、最初の木頭村では、より一層その後進性が強調されてあらわれ、最後の十津川村は木頭村に比してより近代性をおびたものとしてあらわれざるを得ない。この調査が同一時点においてとらえられた各村の實態ではないことを読者は特に留意していただきたい。

この点については、二八年に實施された木頭村をわたくしの研究室で昨年十二月、本年三月に調査したのであるが、この間の木頭村の変化は、電源開發完成の時期に當つていた関係もあつて、相当にはげしいものがあり、本書において、各筆者の間にある程度の見解の相違を残さざるを得なかつた伐畑慣習の問題も一層後景にしりぞき、これを切捨てても問題とならないところまで来ていることを確認し得たのである。

この意味で、調査対象の先進性と後進性との対比については調査時点の相異を特に注意して読まれることを希望する。この書物の構成に従つてその総論的部分である第一編第一章林業の發展過程、第二章山林の所有と借地林業、第三章山林労働と労働組合まで読み進まれた読者は、わが国有数の先進林業地帯たる吉野川流域の林業がどのような發展の経路を辿つて今日に至っているか、そこに典型的といえる資本家的林業、借地林業の

成立過程を解明していることを見出すであらう。同じ吉野郡の林業でありながら新宮の木材問屋に依存して来た北山及び十津川林業が、概して、木材の流通過程を支配するに止まった新宮の木材問屋が川上村の場合と異つて積極的に造林過程にまで進出した点に深い興味をいだかれることと思われる。特に川上村に見られる山林労働の態容は純然たる工場労働者の組織と意識との下に、労働協約を取り結んでいるのであつて、そこに見られる

対立はまさに都市における資本家と労働者とのそれとしてあらわれている。読者はこのような典型的に資本主義的な経済構造をもつ吉野の、殊に川上村と、第二編第一章、封建制下の木頭林業、第二章山林所有とその変遷、第三章山林経営と労働関係、第四章山林と農地に述べられる木頭林業地帯の経済構造とを對比される時、そこに相当のへだたりを読み取られるであらうし、木頭村林業を支配する那賀川下流の製材業者—山林地主の支配の強固さと、その収取の二重性（資本家的、地主的）の執拗さとを認めざるを得ないであらう。しかも封建性と近代性との相剋の中にある木頭林業も、その後森林組合の分裂、（那賀川下流のいわゆる中島財閥の支配下にある木頭森林組合からの木頭村森林組合、上木頭村森林組合の独立）、電源開発のためのダム建設事業による労働力需要の増大によって、著しく変貌をと

げ、封建的収取のうま味は全くといってよい程姿を消していることは指摘しておかねばならない。

以上のような経済構造の比較検討を了った読者はここで村の政治と経済に眼を転じていただきたい。第一編第四章第三節村の政治と経済、同章第四節小樽自治会と階級関係と、第五章第三節武蔵部落の社会構造、第二編第五章政治と階級関係を対照し、経済構造の差異がどのように社会意識に或は政治に反映するか、更に社会意識或は政治の動きはどのような経済構造に基いているのかを再検討していただきたい。読者は経済構造の側面にあらわれている「近代性」と「封建性」の相剋が上部構造の上にも、そのまま反映し、或はよりいきいきと現象していることを読みとられることであらう。「政治と階級関係」においてあざやかにえがかれていた山林解放闘争をめぐる政治の動き、社会党村長による村の政治支配は上北山村の山林解放闘争と同じく、一場の夢に化しはしたが、その後の村の政治情勢の変化は堅實に歩みを進めていることをわたくしたちの行ったその後の調査によれば、認めざるを得ない。

最後に読者は第四章第五節上北山村の生活状態、第五章第四節十津川村の生活状態、第二編第六章生活及び医療の實態に辿りつかれる。この生活實態の調査のみが、主として対象となつた三ヶ村を全く同一のメンバーによる又完全に同一の方法論を

以てする實態把握であつて、その意味では、統一ある視角に立つての比較検討がなされ得るのである。わたくし自身も調査対象となつた三村の生活實態がこの各々の經濟構造とその性格をどのように反映するかを興味を以て吟味することが出来た。殊に三ヶ村の婦人の地位、婦人労働の輕重の比較は教えられるところが多かった。

以上のような読み方は最もオーソドックスな読み方であるが、この方向を全く逆に読み進んで行くことも興味があるう、最も具体的に旅行者の眼にも先ずとびこんで来る山深き村々に住む人々の生活のあり方から出發して、その各々のもつ生活態容の相違が一体どこから来るかを探究することによって、その經濟構造、その歴史的变化に及ぶことも当然考えられる。又特に歴史に興味をよせられる読者はこの書物の歴史叙述の部分をピクアアップして川上村を主として対象とする第一編第一章第一節封建制下の吉野林業と、第四章第二節徳川時代の上北山村、第五章第二節明治維新と十津川村、第二編第一章封建制下の木頭林業を読まれた後、主として十津川村を対象としたものではあるが、明治維新以後の日本林業の資本主義的發展の過程を正確にとらえている第一編第一章第二節資本主義と吉野林業を、そして最後に統制經濟下の日本林業のあり方を代表する戦時戦後の吉野林業といった形で読まれるならば、現在迄とま

つた形で述べられて居らない日本林業發達の歴史を地域こそ限定されているが美事に一系列につづつたものとして認められるであらう。

更に山林の所有については、農学部林政學を専攻される半田助教が、土地台帳をもとにしたまことに克明な分析を集約的に取まとめられたものであり、林業經濟の最も基礎的研究に貴重な業績を加えられたものとして、感謝の意を表さねばならない。同一視角の下に見られた各村の山林所有の比較はわれわれに多くの問題を提供している。

二

以上この書物の構成の上からころみに読者がどのように読むことがのぞましいかを示して見たのであるが、次にこの書物が一体どのような社会科学上の問題を提起しているかについて簡単にふれて見たい。

河野氏もこの書物の序においてのべて居られるように。わが国の社会科学は、したがってまたわが国の社会的實踐は、林業地帯がなげかける問題を正しくとりあげ、誤りなき方向づけをあたえて来たとは言えないのである。周知の如く、わが国の農地改革は山林所有の問題をあたかも一種のタブー視して、これをさけて通つたことから、日本における封建的關係は、山林地

地帯を主要な地盤として残存したという見解が生れ、ここから又このことを主要な根拠として、戦後の農地改革の果した積極的な役割を全く認めない見解すら生れて来ている。このような見解に対して、これが「はたして事實によって正当に裏づけられたものといえるであろうか、又こういう見解から導き出される社会的實踐をわたしたちは有効なものと認めることが出来るであろうか。」という疑問は社会学者として当然いだかざるを得ぬのである。

このような疑問に対して社会学者の答える道は、山林地帯を實地に踏査して、何よりもまず事實の物語るところを虚心にきくこと以外にはありえない。そしてそこから既成觀念にもとづく論理ではなくて、事實にもとづく論理をひき出すことが必要である。

この書物は上述の意図に対して、未だ十分とは言えぬが、事實によって、従って理論をおしつけることなく、ある程度の成果をあげているものと見なければならぬ。

調査地域としては関西の林業地帯にかぎられ、それも民有林の發展した二つの地帯がとりあげられているにすぎないけれども、この二つの地帯のうち、ことに吉野林業地帯はわが国における最も先進的な民有林地帯であり、最も資本主義的林業の發展した地帯である。ここでの林業の發展がどのような経路を辿

つて来たか、又現状がどうなっているを明かにしたことは、日本資本主義發展史の空白を埋めたこととなり、大きくいえば日本資本主義の構造把握にたいして、新しい視点を導き入れるに役立ったことにもなる。更にこの地域に比較して新興的林業地帯として、吉野郡の上北山村、十津川村及び徳島県木頭村の林業地帯をとりあげることによつて、おくれた林業の急速な發展、日本林業の方向をあとづけ、林業のあり方を広い地盤の上で検討する可能性をあたえてくれたことは認めねばならない。従つて調査地域の狭さにもかかわらず、この調査結果から、かなり広範圍に、又前進的に、後れた山村地帯の将来の見取図として、多くを学び得るのではないかと考えられる。

要するにこの書物の社会科学上の問題提起としては、第一に従来の山村經濟の實態把握が、ほとんど農業、林業の未分化状態にある、即ち林業專業への傾斜をもたないか、或は持つとしても常に農業への執着を捨て去り得ない、いわゆる「山村」を対象としているのに対し、この書物は林業專業地帯を対象としてとらえていること。第二に、第一の問題と直接に結びついて、従来の山村の經濟構造の把握が、著しく「封建性」の方向に傾きすぎるきらいがあったこと、それは採草地、薪炭林に重点が指向されたことと関連して、ここからは「近代性」の方向が無視乃至忘却視されすぎる結果が生れてくるが、林業に視點

三

を移す場合、同じく山村に位置しながら、そのような實態を示すものとは言えぬことが、この書物から読みとられる。この書物の示すところは、後進林業地帯においても、「近代性」と「封建性」の相剋は、徐々にではあるが前者ののびゆく結果として、衣換えて行く過程である。第三にこの書物は、同一の対象を各専門分野から各々独自の方法論に立脚してとらえているのであるが、対象にあくまで忠實に取りくんだ結果として、多少の見解の相違を示しながらも、大体において統一した方向を指し示していることが指摘されねばならない。第四に従来の山村の實態把握が経済学的な把握というよりは、むしろ社会学的把握の色彩を濃厚に持ったものであったのに対し、この書物においては、経済学的に適確な把握を主要目標として、それが成功していると思われることは重要である。

読者はこの書物によって、山深き吉野に、又かつては平家の落武者の住むとたえられた人里はなれた木頭に、資本主義のはげしい流れのぶちあたって行く様相を読みとられ、そこから山村における「近代性」の無視し得ぬ事實を理解せられたことと考える。この書物は、上述の如き一の新風を学界に吹きこむであろうという意味では、啓蒙の書と名づけて誤りとは言えぬであらう。

最後にこの書物がはたし、又はたすであらうわが国社会科学の一步前進を十分評価した上で、なお今一步前進せしめるための若干の希望をのべておくならば、工業部門に対比しておくれたわが国農林漁業の三原始産業のうち、漁業、林業は農業に比して、大規模な企業家的経営の優位は動かせぬところであるが、農業においては、殊に水稻栽培の場合、経営大規模化が著しく立ちおくれ居り、執拗に生きのびている小規模農業は漁業林業と大きく結びつけられている事實が、より深く究明されねばならぬと考えられる。小規模農業から生れる季節的過剰人口は林業漁業への労働力の最大の給源であり、又その低賃銀の基盤であることに焦点をおいた研究が期待される。第二に林業経済の面で重要な課題は、国有林地帯と、共有林(町村有林、部落有林)にウェイトのある地帯、並びにこの書物でとりあげられた民有林地帯との対比である。同じく林業地帯といっても、そこに村の経済構造の上に、林業生産力の上に、更に村民の生活實態、及び意識の上に相当のひらきを見るのであって、この調査においても上北山村の小樽地区と川上村の相違、或は同じ四国の林業地帯に位置をしめながら民有林地帯の代表と見られる木頭林業と、国有林を中心とする高知林業との差異が問題である

う。この意味でこの林業問題研究会が更に次の目標を国有林地帯、共有林地帯へと漸次その調査の枠をおしひろげると共に、更に採草地の意義のな十分に認められるいわゆる「山村」地帯を今一度新たな視角を以て見直してみることが是非必要であると思われる。古い伝統にしばりつけられ、「封建性」の重圧にあえいで来たわが国の農山漁村も一年と衣換えを行って来ている。世界のめまぐるしいばかりの社会経済の変転は直接間接に休みなく、山に海に平場にその影響をあたえつつある現在、社会科学の理論は現實に追いつくことにおわれているのが實状であり、われわれの眼は休むことなく常に現實を直視せねばならない。

このような意味で今なお多くの村で見られる「封建性」と「近代性」のはげしい抗争の中から、過去のそれではなく、次にあらわれるものへの前進を、如何に微細なあらわれであろうと見落すことなくとらえることが必要と思われる。「封建性」の諸現象のいわば脱皮作用がたえまなくつつけられている。脱皮され衣換えした「封建性」は一枚その衣をとれば「近代性」の内實をそなえていることに注目せねばならない。

吉野川上林業の蓄積せられた資本は、「封建性」のうま味を十分吸いつくした後、四国の林業へと西進する。ここでもすでに限界に來た「封建性」のうま味は、木頭林業のチャンピオン

Y氏をして、更に西に眼をむけさせ、九州の熊本、大分等の山林地帯に投資対象を移動させようとしている。又四国に渡った吉野林業資本も同じく九州へとその鋭い吸角を差しむけているときいている。資本家のな利潤追求で満足すべきは、近代林業家は過去の封建的収取のうま味が忘れられず、その対象を九州山林地帯に集中して行きつつあるのが現在の状況である。ここでもやがてその限界につきあたるのは眼に見えているのである。

執筆者紹介

島 恭彦	京都大学教授
今川 正	香川大学講師
岡田 賢一	京都大学大学院学生
山岡 亮一	京都大学教授